理事長コラム〈16〉〝世界を生きる〟

学校法人 渡辺学園理事長　菅谷 定彦

日経米州編集総局長時代②

ワープロ送信用の壁の穴開け・配線で2つの労組と交渉

1987（昭和62）年3月にスタートした日本経済新聞・米州編集総局の総局長として日々のニュース、企画をアドバイスすると同時に、新しい仕事として取り組んだのは現地記者・スタッフの採用、わが国報道界初の記事のワープロ入力・送稿、そしてスタッフ全員を対象とする健康保険の導入を含む現地法人化のルール作り。この「ヒト」・「モノ」・「カネ」の3つの経営資源の確立を5月の米州編集総局発足と日本経済新聞のニューヨーク現地印刷開始記念パーティをはさんで、6月末までに達成する目標を定め、田尻編集部長に手伝ってもらい、私の責任で実現することを決めた。

女性記者として採用したのは前回紹介した福田嬢とニューヨークでフリーランス記者をしていた大林嬢の2名。2人共英会話力は日本から派遣された9名の精鋭記者より優れていたが、日本語の文章力に難がある。これを田尻部長、関山次長らがカバーし1987年10月のニューヨーク株大暴落（ブラック・マンデー）時のウォール街取材、翌年2月のカナダ・カルガリー冬季オリンピック取材で力を発揮してくれた。米国人では長年勤めているバーバラ秘書に加えアシスタント兼秘書の女性を採用。ニュース、解説、マーケット情報など日経本社の旺盛なニーズに応え得る「ヒト」の体制は一応整った。

菅谷が東京本社産業部長時代に責任部長を務めた第1回日経優秀製品サービス賞　表彰式の打ち上げ会食。右端が森田社長（於 ホテルオークラ）1983年春

「モノ」で苦労したのは、わが国初の記事のワープロ入力・送稿の新システム導入である。ワープロは東芝製の最新鋭機をトロント、サンパウロ両支局を含む総局全員分が比較的スピーディに入手できた。私のニューヨーク特派員時代はテレックスやロイターの専用回線にローマ字で入力、これを東京外報部で日本語に書き直す手間がかかったが、今回は日本語でワープロ入力すればそのまま外報部改め国際部の端末に再生される優れた仕掛け。

ところが大きな問題が発生した。送稿のための配線でマグロウヒル本社内にある米州編集総局の壁に穴を開け、ラインを通さなければならない。第一歩としてマグロウヒル本社の担当セクション責任者にまず了解をとった。ところがいざ工事になると壁に穴を開ける作業と配線の仕事は、2つの労働組合のOKを取らなければならないことが判明した。

米州編集総局内で記事のワープロ入力をみる菅谷（中央）1987年11月

私のニューヨーク特派員時代から米国の労働組合が日本の企業内組合と違って職能別であることは十分理解していたが、これほど細分化されているとは思わなかった。やむなく2つの労組幹部と話し合いを始めたが、途中で1つの組合が待遇改善でストライキを打ったこともあり工事完成に1カ月半を要した。並行してワシントンなど米国4拠点とトロント、サンパウロの総局全域の完成には1年近くを要した。

3つ目の「カネ」は総局の人員拡大に伴って必要となった法人化と税金の支払い。これに関連しての健康保険への加入、現地採用スタッフの給与や労働条件の取り決めなどである。私の特派員時代仲良くしていた村瀬次郎ニューヨーク州弁護士に労働法専門の弁護士派遣を要請、やって来たのは有能だが、日本語を一言も話せない人物。1ドル＝360円の特派員時代、月1，200ドルの月給プラス3年目にはボーナスの半分を妻から送金してもらったのを加えても高価な健康保険に加入する余裕はなく、歯医者や内科医にかかると1回50ドル～100ドル。3年間で300万円の借金を残した〝赤貧〟時代の苦労を私自身も部下にも味わせてはならないと、田尻部長と共に4日連続の打ち合わせで「カネ」を軸とするルール整備を終えた。

1987年5月、セントラル・パーク前のホテル・ピエールで開いた日経主催パーティには森田康社長が出席、大盛況の内に無事終了したが、前日森田社長は秘書を連れず一人でケネディ空港に到着した。重要パーティへの社長出席のため、営業・渉外部門である日経アメリカ社の大原社長、菅野副社長が出迎えの予行演習までしていた。ところが森田社長は来訪客の多くが出るゲートでなく、20m離れた別のゲートから出てしまった。

そこへ紳士風のアメリカ人が「Mr. Morita、お迎えに上がりました」と話しかけて来た。ニューヨーク特派員を経験、英語に自信のある森田社長は疑う事無く米国人ドライバーの運転する〝白タク〟に乗り込んだ。後から調べると日本人旅行者がトランクに付けている大きな名前のタグを見て騙す事件が増えている時期だった。

森田社長の乗った車は大原、菅野の2人を空港に残したままマンハッタンに向ったが、降ろされたのはハーレムのど真ん中、いくら金を取られたのか森田社長は言わなかったが、タクシーを拾いホテル・ピエールへたどり着いた。入口で森田社長の東大時代からの親友で山本・米国川鉄商事社長が声を掛けたが「森田さんは返事をせず、憤然としてホテルに入ってしまった」山本社長から菅谷に電話が入った。

真相が判ったのは森田社長と大原、菅野、菅谷、田尻の5人でニューヨークの「吉兆分店」で夕食をする直前のこと。森田社長は始めのうちは大原、菅野には全く口を開かなかった。私が見かねて「人間、一生懸命やってもミスはありますよ」ととりなすと森田社長は少し機嫌が良くなった。

※次号は〝世界を生きる〟「日経米州編集総局長時代③」です